

## 東日本大震災の被災地調査における開発のあり方

小池 俊仁、池上 宗仲、井上 ちよ、大原 由衣、奥田 望  
川原 愛美、北川 真幸、金 智娜、雲根 郁子、杉谷 祐子  
玉置 友圭子、松崎 友美、戎谷 翔、森江 紗矢佳、八木 佐知子  
柳本 彩花、山口 伽純、山本 大樹、渡辺 美穂、森岡 美貴

### はじめに

私たちのゼミではさまざまな貧困の問題や国際開発、国際協力について学んでいる。本来、国際支援というのは先進国側から途上国側へ行われるものである。しかし、2011年3月11日に東日本大震災が起き、日本は大きな被害を受けた。東北地方の人々は途上国を含め多くの国々から支援を受けることとなった。この意味では、東北地方の人々は途上国の人々と同じような状況に立たされたことが言える。そして一年たった今、国内のボランティア活動などの助けもあり復興はある程度進んだものの、いまだ

に多くの人々が苦しい生活を強いられているのが現状である。

そこで、実際に現地に足を踏み入れることにより今の状況を自分たちの肌で感じ取り、また現地の方々のお話から得られた情報や体験を通して震災の教訓を今後の国際開発、国際協力にどう活かせるのかを学びたいと思い、現地調査における開発の在り方をテーマとして今回の研修を行うことに決めた。そして、東北の人々は何を必要とし、私たちのような外部の人間に何を求めようとしているのか、被災地支援において本当に求められているものを見極め、それを途上国開発につなげるだけでなく、社会的に恵まれない人々に対する協力のあり方を考えていくこととした。そのために、震災後現地の人々が団結し自ら立ち上げた気仙沼復興商店街と現地で活動を展開されている国際協力 NGO を訪問することにした。

研修を実施するにあたり、私たちはゼミの時間や空いた時間をこまめに使い事前学習を行った。役割分担を決め各グループに分かれ、それぞれの訪問先についての活動内容、活動目的などの基本的な情報を調べ皆で発表し合った。事前に訪問先と連絡を取り合い、常に皆が情報共有をしていく中で準備を進めていった。また、訪問先への質問を皆で話し合い、目的意識を持ち、少しでも多く学べるように事前に準備を行った。

### 9月5日午前 ～復興商店街から学んだ現地密着型の地域再生～

まず、NPO 法人気仙沼復興商店街を訪問した。そこで、副理事長を務める坂本正人さんに、震災当時の体験談や震災後に商店街を立ち上げるきっかけ



写真1 私たちが利用した気仙沼復興商店街「南町紫市場」の様子

となった理由などについてお話を伺い、現地密着型の地域再生について学んだ。

私たちが訪れた復興商店街は「南町紫商店街」と言う。その地域の青年会会長を務める坂本さんの呼びかけによって立ち上げられた。ここには50店舗近くの商店があり、気仙沼の復興への熱い思いを感じられるところであった。震災直後、気仙沼港から近いこの南町は津波でほぼ壊滅し、この土地で商売をすることを諦めていた方がいたにも関わらず、そこからもう一度人々は立ち上がった。震災発生から、商店街の立ち上げ、そして現在に至るまでのお話を聞く中で、私たちはとても心に残ったことがある。それは「震災の影響を受けていない私たちの様な若者に、求めることは何ですか？」という質問に対し、坂本さんが「この現状を見てほしい。そして伝えてほしい。」と瞬時に答えてくれたことである。その言葉は私たちの胸にとっても響いた。坂本さんのおっしゃる通り、見たもの、聞いたことを伝えることは、私たちに出来る唯一の事かもしれない。しかし、そこには大きな力があり、むしろそれは責任であると私たちは感じた。

また、坂本さんのお話からこの地震のような緊急支援に一番必要なものも学ぶ事が出来た。それは、「いち早くコミュニケーションを確立する」、そして「その土地にはその土地にあった支援をする」という事である。一つ目の、素早いコミュニケーションの確立が出来たために、この地域では震災の翌日から役割分担が始まり、すばやい対応と処置がとられたようだ。また二つ目の、その土地にあった支援というのは、この東日本大震災の支援が、阪神淡路大震災と同じでは意味がなく、その土地にあった支援の形があり、それが必要であるという事であった。これは国際開発の分野で私達がすでに学んだことと同じであることが分かった。大学で勉強したことを実体験として知れたということは、私たちにとって本当に貴重な学びとなった。

このように、商店街で坂本さんやお店の方々とお話をする中で、私たちは普段の勉強の分野である開発やエンパワーメントについても重要な学びを得ることが出来たのである。支援者側の熱い思いだけでは開発や援助は成り立たず、その土地に住んでいる人々に直接耳を傾けること、そこからがスタート

であり、一番重要な基本となるのだ。ここでの学びを私たちはこれからの研究や、未来へと活かしていきたい。そしてそのためにも、気仙沼で見たこと、聞いたことを私たちは伝えていこうと心に決めたのである。

## 9月5日午後 ～国際協力 NGO の活動からみる東北支援のあり方～

午後は二つのグループに分かれ、国際協力 NGO である JVC（日本国際ボランティアセンター）と SVA（公益社団法人シャンティ国際ボランティア会）をそれぞれ訪問した。国際協力 NGO であるため、主に海外事業と東北事業の違いや共通点、以前からの国際協力の経験が今回の東北支援においてどのように活かされたのか、また震災後の支援活動が今後の国際協力に活かされていくのかについてお話を伺った。

JVC（日本国際ボランティアセンター）は、主にアジア、アフリカ、中東で支援活動を行っている国際協力 NGO である。2011年に日本で未曾有の東日本大震災が起きたことを受け、東日本大震災の被災地でも活動を行っている。JVC は東日本大震災の支援において、活動の中心となっている宮城県気仙沼市鹿折地区で、①生活再建支援、②「場づくり支援」、③学校支援、④伝統芸能の復活、⑤仮設住宅の支援、⑥行政・他団体との連携などを行っている。

JVC が気仙沼に事務所を立ち上げた後、初めて行ったことは、鹿折地区の全戸訪問である。支援を行う際、どうしても避難所や仮設住宅ばかりに焦点が当たり、在宅被災者は常に見落とされがちであるからだ。彼・彼女らもまた被災し、日常生活が困難な状況に置かれていたのである。全戸訪問を行い、在宅被災者を一人残らず割り出すことで、彼・彼女らのニーズを一軒ずつ聞いて回ることができる。特に近隣の多くの人々が家を離れる中で、在宅被災者は喪失感や孤立感を非常に強く感じている人が多く、JVC 主催のイベントなどを通してそれをやらせられる活動を行っている。

また、これまで JVC が長年にわたり行ってきた国際協力の経験が、今回の支援においてどのように活かすことができたのかというお話も伺った。支援

は海外であっても日本であっても、その地域によって、また人によってニーズは変わるため、全く「同じ支援」を行うことはできない。そのため、支援をする際は試行錯誤の連続であるようだ。しかし、東北で支援を行う際に、JVC がこれまで海外で支援活動をするにあたり掲げてきた「行動基準」は今回の支援でも共通して活かすことができたようだ。その主な行動基準とは、「活動への人々の主体的な参加」、そして「依存を生まない対等なパートナーシップ」である。外部の人ではなく、地域の人々が主体となって、問題の解決方法を考え行動することは、地域の人々が真に求める結果を生むことに繋がる。更に、モノ、カネなどの投入に細心の注意を払い、できるだけ物資の支援を行わないことで、依存を生ませず、地域の自立を目指すのである。

お話を伺った後事務所を離れ、JVC の方と共に実際に活動されている地域や仮設住宅を訪れた。その際に感じたことは、JVC の方と地域の方々との強い信頼関係である。そこで出会った地域の方々とは皆 JVC の方を歓迎し、なごやかに会話をされていた。その地域の「人」との信頼関係を構築することは、被災者が真に求める支援のために必要不可欠なことだと感じた。

社会的に恵まれない立場にある人々への国際協力を勉強する私たちにとって、これまで世界の多くの地域で支援を行ってきた JVC の活動は非常に興味深かった。JVC の行った全戸訪問は、被災者が誰一人として排除されることなく支援を行うことが可能である。地道ではあるが、支援において非常に重要なことだと感じた。更に、海外協力 NGO が海外事業の経験を活かして被災者のニーズにどう働きかけるかを確認することができた。

もう一方のグループが訪問することとなった SVA は、1980 年にカンボジア難民キャンプで子どもたちに絵本を届けることから活動を始めた公益社団法人である。アジアの子どもたちへの教育・文化支援を通じて、「共に学び、共に生きる」をモットーに、平和な社会の実現を目指している。そして、これまでの 30 年以上にわたって国内外 20 を超える災害復興支援の経験を最大限に活かし、3.11 に起きた東日本大震災を期に、気仙沼の清涼院境内にコンテナハウスを設置することで、炊き出しなどの緊

急救援活動にまず取り組んだ後、今ではコミュニティ支援などの復興支援活動を行っている。

私たちが訪問した際には、学生ボランティアと共に、地域の人を主体とした『震災復興計画』の策定に取り組んでいた。SVA では、地域の一人一人の気持ちを理解する努力をすることで本当に必要な援助が見えると考え、地域の人との関係構築に力を入れている。そのため、地域の人に「主体性」を持たせる協力や地域の人と学生ボランティアの関係を築く手助けの役割も担っている。

また、お話を伺う中で、これまでの国内・海外支援を通しての教訓が今回の東日本大震災に「直接的」に活かされているわけではないことを知った。なぜなら、気仙沼事務所では震災後にメンバーを集めたため、阪神大震災の現場で活動していた人や海外支援の経験を積んだスタッフがほとんどいないからだ。しかし、活動を通しての理念や方向性は共通しており、気仙沼での活動においても「人材育成」や「教育支援」に力を入れ、「共に生き、共に学ぶ」というモットーの元、地域の人々が中心となり自分たちで街づくりの活動ができるような人材育成を最終目標としている。他にも、週に一度、気仙沼で活動している他団体との協議を行っている。このことは、国際 NGO の緊急系支援の際に重要である他団体との「情報共有」や「役割把握」と同様の取り組みであり、「間接的」にはこれまでの支援が今回の支援につながっているのではないかと考えられる。

さらに、「私たち外部の人間には何ができるのか」という質問をした際の代表者の方の言葉が印象に残っている。私たちと同じように SVA を訪問してきた人が同様の質問をされることがあり、代表者の方は反対に「あなたたちに何ができるの?」と聞きたいとおっしゃられた。このことから、私たちは自分たちに何ができるのかを考え、見つけることが大切だと感じた。これは、ボランティア活動に参加することはもちろんのこと、現地の事実を知った上で「伝えること」や「関心を持続けること」が大切であり、私たちに出来ること、求められることだとわかった。

以上の事から、気仙沼での働きが今後の途上国支援にどのようにつながっていくのかを考えることを目的としていた私たちにとって、今回の SVA での



写真 2 気仙沼市内にある津波の影響で内陸まで流された大型漁船の様子

お話は新しく知ることが多くとても刺激的な経験となった。SVA は国際 NGO での経験から、地域の人に主体性を持たせ、人材育成に力を入れることで「一緒に成長していく」支援を行っているため、将来的に地域の人たちが街づくりができるようになると考えている。地域の人たちが自立して活動できるようになることは、気仙沼の今後の復興に当たり重要なことであり、望ましい支援の在り方であると感じた。また、今後この経験を伝えていくこと、気仙沼に対して関心を持ち続けることが大切であり、私たち外部の人間に求められていることだと知った。そのため、私たちは今回の経験を留めることなく、発信していかなければならないと感じた。

## おわりに

今回、私たちはこの研修を通して、現地の方々、NGO/NPO 団体、学生など本当に様々な人たちに会い、お話を聞くことができた。その中で私たち一人一人が考え皆でディスカッションを重ねた結果、共通して感じたことは、被災地支援において現地の地

域住民に主体性を持たせることが何より重要であり、また彼・彼女ら自身が問題の解決方法に対し行動できるような自立心をつける手助けを私たちがすることである。支援者が現地でのプレイヤーとなり一方的な支援になることを避けるため、地域住民に直接耳を傾け真のニーズを見つけ出す。そこで、それに見合った支援をするよう細心の注意を払うことである。しかし、「人」によりそった支援はそれぞれニーズが異なっているため、より多くの人との協力や連携をした上で、そのニーズに適したやり方で支援を行うことが大切である。そして、これらに対して地域住民との信頼関係を構築することが根本的なものとなり、支援を行っていく上では必要不可欠なものになる。このように、私たちは自らが支援して得た被支援者とのつながりを他者にも伝え、支援を必要とする人々への関心やつながりの和を広げていくことが重要であることを学んだ。

また、今回の研修を通して学んだことは、途上国開発や社会的に恵まれない人々への支援のあり方にも共通して言えることが分かった。国際協力 NGO

のお話でもあったように、海外支援での経験が今回の東北での支援に直接的に活かされているわけではないが、その土地や地域の真のニーズを見つけ出し、それにあったやり方で行い、あくまで対等な立場をとった上で住民参加の支援をする点では、国内や海外問わずすべてにおいて共通するものであることが分かった。

私たちは、現地へ行ったからこそ味わうことのできた経験や被災によりすべてを失ってしまった人々がもう一度立ち直り前に進もうとする精神力の強さ

をみることができた。こういった事実をこれから周りの人々に何らかの形で伝え広めていきたいと思う。また、行って帰ってきたままにするのではなく、今回の研修を通してできた東北の人たちとのつながりを大切にし、少しでも東北の人たちのために何か役立てられることをしていきたい。そのために、いつまでも関心を持ち続けることを忘れず、私たちにできることを考え、積極的に行動に移していきたい。